

# ひょうごの遺跡

## 『茶の湯』の考古学



茶の湯は、桃山時代に千利休が大成してのち、時代に応じてさまざまな工夫が加えられ、現在でも多くの人が嗜む、お稽古事のひとつとして受け継がれている日本の伝統文化です。また、華・香・書・懷石・建築など多様で多彩な文化とも深く結びついています。

千利休の茶の湯は「詫び茶」と呼ばれますが、それ以前に行われていた茶の湯もあります。利休は、「茶の湯とはただ湯をわかし茶を点てて飲むばかりなる事と知るべし」という言葉を残していますが、茶の湯にはさまざまな道具が使われています。兵庫県内では遺跡の発掘調査によって茶の湯に関係する道具が数多く出土し、その中には全国的に珍しい貴重な資料もあります。この号では発掘された茶道具を中心に、それがどのように使われていたのか、どう変化したのかをご紹介します。

下の写真の茶道具は、茶杓と柄杓、敷板以外は全て県内の発掘調査で出土したものです。



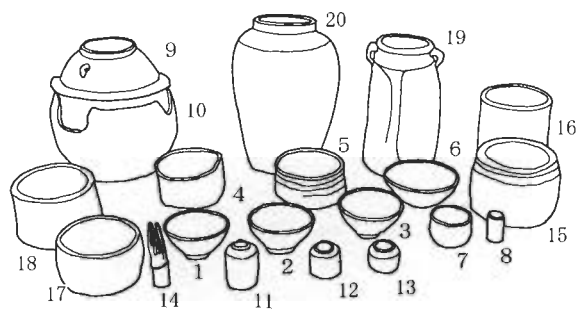




県内の遺跡から出土した主な茶道具

- |               |            |
|---------------|------------|
| 1. 中国産天目茶碗    | 2. 美濃産天目茶碗 |
| 3. 美濃産天目茶碗    | 4. 織部黒茶碗   |
| 5. 志野茶碗       | 6. 総織部平茶碗  |
| 7. 楽茶碗 (了入写し) | 8. 茶巾筒     |
| 9. 茶の湯釜       | 10. 風炉     |
| 11~13. 茶入     | 14. 茶せん    |
| 15・16. 水指     | 17・18. 建水  |
| 19. 花入        | 20. 茶壺     |

姫路市教育委員会蔵 4~6、12、13、15  
 篠山市教育委員会蔵 11、19



姫路城西御屋敷跡庭園「好古園」

表紙の庭園

にしお やしき こうこえん  
 姫路城西御屋敷跡庭園「好古園」は、昭和60年以降の発掘調査で確認された西御屋敷跡・武家屋敷跡・通路跡などの地割りを活かし、造られました。9つの趣の異なった庭園群が約1万坪の範囲に広がっています。また、本格的な数寄屋建築の茶室「双樹庵」では、茶庭を觀賞しながら一服の茶を喫することができます。

左の庭園は、世界文化遺産・国宝姫路城を借景とした「築山池泉の庭」です。

姫路市本町68  
 JR姫路駅下車、徒歩20分



## 茶碗 (ちやわん)

茶道具の中で、もっとも重要なものが茶碗です。唐物と呼ばれる中国産の舶載品、和物と呼ばれる多くの日本産の茶碗、これらを季節や目的により選んで使います。

茶碗の変遷をたどると、鎌倉時代から室町時代にかけては、中国の茶碗、いわゆる唐物茶碗が多く、黒い鉄釉のかかった天目茶碗を中心に、青磁や白磁の茶碗が用いられました。鎌倉時代、茶は僧侶や上流階級の嗜好品にすぎず、唐物茶碗が広く使用されるようになったのは、室町時代中頃（15世紀）、足利義政の東山文化の時期でした。その後、喫茶の風習が京都・堺の町衆や庶民にも広まり、国内の窯でも茶道具が焼かれるようになりました。このため、茶道具の好みは多様になり、茶碗の主体も唐物から和物に変化してゆきました。和物茶碗の中でもっともよく出土するのは、瀬戸（愛知県）・美濃（岐阜県）窯の天目茶碗で、中国産の天目茶碗をモデル（手本）にしています。もともと、瀬戸窯では、中国産の青磁・白磁などの形をうつした灰釉陶器を焼いており、鉄釉の開発によって、室町時代に天目茶碗の生産が始まり、全国に流通しました。

安土桃山時代（16世紀）になると、唐物茶碗の写し、という唐物の代換品としての和物茶碗ではなく、全く新しい茶の湯のための和物陶器（＝桃山茶陶）が生まれます。京都で焼かれた楽焼、美濃で焼かれ、白い地に鉄釉（茶褐色）で絵を描いた志野、緑色の釉にゆがんだ造形が特徴的な織部、象嵌・ハケ目・二釉かき分けなどさまざまな装飾をこらした肥前の唐津（佐賀県）などです。これらは中国陶磁（唐物茶碗）の影響を受けつつも、それまでの物とは全く違う個性的な茶碗であり、茶人たちに大変好まれました。

兵庫県でも、瀬戸・美濃窯の天目茶碗が数多く出土しています。博多と並ぶ中世の国際貿易港である兵庫津遺跡（神戸市）、此隅山城の城下町である入佐川遺跡（出石郡出石町）（3）、中世の山城である中尾城跡（三田市）など県下全域で出土し、県下における茶の湯の広がりがわかります。

この瀬戸・美濃天目茶碗のモデルになった中国産天目茶碗は、（1）の出土した兵庫津遺跡（神戸市）の他に、鰯宿に関連する福田片岡遺跡（龍野市）、但馬守護山名氏の此隅山城の城下町である宮内堀脇遺跡（出石郡出石町）、福原京の推定地である祇園遺跡（神戸市）など、港・宿・城下町・邸宅として当時、物の流通が活発だった場所から出土しています。

一方、志野・織部の優品は姫路城から出土しています（4～6）。姫路城は天正8年（1580）に羽柴秀吉が入城し、城下の町づくりを開始しました。県内では篠山城旧三の丸跡（篠山市）、太閤の湯殿として有名な有馬の湯山遺跡（神戸市）からも出土しています。志野・織部は、港町・城下町など全国の都市遺跡から多く出土しています。



中国産天目茶碗（1）



美濃産天目茶碗（3）



志野茶碗（5）



総織部平茶碗（6）



## 茶の湯釜 (ちやのゆがま)

茶を点てるために湯を沸かす道具である茶の湯釜には、陶磁器製のものもありますが、多くは鋳鉄製のものです。洲本城武家屋敷跡（洲本市）より出土した茶の湯釜（9）は、瓦質の焼き物で、表面には煤が付着していました。丸みを帯びた胴部分には、鑲付（釜の持ち運び用の把手）や襦肌（釜の表面に円錐形突起を埋めつくした文様）がみられ、鋳鉄製の茶の湯釜をまねて、金属の質感を再現しています。

## 炉 (ろ) と風炉 (ふうろ)

茶の湯では、炉の季節、風炉の季節というように大きく二つの季節に分かれます。炉は囲炉裏のようなもので、茶室の畳を二尺（およそ60cm）四方程度切り込んで炭を入れ、茶の湯釜を据えるもので、立冬の節（11月8、9日頃）に開け、立夏（5月5、6日頃）に閉じるのが標準とされています。炭を中に入れ、火をおこしてその上に茶の湯釜をかける風炉（持ち運びのできる炉）は、5月の初めから10月の末頃までがその季節となります。しかし、茶室に炉が切られる以前は、一年中風炉が使われており、現在でも季節に関係なく野点などに使われています。風炉は材質や形などさまざまな種類がありますが、明石城武家屋敷跡（明石市）より出土した風炉（10）は、ずんぐりとした丸みのある形で、口縁部に3個の窓が開いています。土師質の焼き物で、表面に赤色顔料が塗られています。

## 茶入 (ちやいれ)

茶入は抹茶を入れて点前に用いる器で、漆器の「棗」と陶磁器の「茶入」が代表的なものです。茶入は、形の特徴によって肩衝・文琳・茄子・芋子などと呼ばれ、鎌倉時代以降中国から渡ってきた唐物と日本各地の窯で焼かれた和物があります。和物は、瀬戸（愛知県）・美濃（岐阜県）・信楽・膳所（ともに滋賀県）・備前（岡山県）・萩（山口県）や兵庫県の丹波などの窯で焼かれたものです。

茶入には、銘（その来歴などを記した名称）がついているものがあり、それらの多くは現在、美術館などに所蔵されています。

兵庫県内では、篠山城旧三の丸跡から肩衝茶入（11）が、姫路城の昭和の大修理の時、大天守地下より芋子茶入（12）が出土しています。



## 茶「筵」と茶「釜」（ちやせん）

茶せんは抹茶を点てる時、茶を練ったり、かきまわして泡をたてるものです。現在の茶の湯で使われている茶せんは室町時代後期に高山宗朗が創作し、奈良県生駒地方で高山茶せんとして代々技術が受け継がれ、製作されています。茶の流派や点前によって竹の種類・穂の数・形・長さや太さなどが異なり、百種類以上の茶せんがあります。「せん」は「筵」（ささら）の字が使われるのが普通ですが、現在の茶せんのおよそ9割を占める高山茶せんでは、「全き竹を創る」の誇りをもって「釜」（細き竹を編みたるもの）の字を使います。

茶せんの出土は全国でも数例が報告されているだけです。袴狭遺跡（出石郡出石町）より出土した茶せん（14）は、穂の数が74本、根元近くには編み糸の痕跡が残っていました。周辺から出土した土器などからみて室町時代中頃のものと考えられ、高山茶せん以前のものになります。



## 茶せんの保存処理

これまで竹製品の保存処理は、表面のつるつるした部分と内部のざらざらした部分の質の違いによって、保存処理液が均等に浸透しないので困難でした。兵庫県では、袴狭遺跡から出土した茶せんを（財）元興寺文化財研究所（奈良市）に委託して、脂肪酸エステル法（自然精油とロウの一種を遺物に含まれた水と置換する）という方法で処理を行いました。この保存処理によって、茶せんは出土した時の状態を保ち、後世に残せるようになりました。



## 水指 (みずさし) と建水 (けんすい)

茶の湯では、茶席に水を入れておく器と、茶せんや茶碗をすすいだ湯や水を捨てるための器が必要です。前者は水指、後者は桃山時代には水翻、近代以降は建水と呼ばれます。姫路城の北部中曲輪武家屋敷跡・本町拘置所地点より出土した水指 (15) は、16世紀頃に唐津 (佐賀県) で焼かれたものです。水指には、焼き物あるいは塗り物の蓋を付けますが、出土品ではどのような蓋が使われていたかわかりません。現在までに255次もの発掘調査が行われている有岡城跡・伊丹郷町 (伊丹市) から、水指 (16) と建水 (17・18) が出土しています。伊丹の地は、天正2年 (1574) に荒木村重が入城し、それまでの地名を有岡と改名、城下町として発展しました。そして、江戸時代には在郷町 (商業的性格をもつ集落) として酒造りで栄えました。

### 花入 (はないれ)

茶の湯は、茶人や職人によって作られた芸術品ともいえる茶道具を使用します。茶席で自然の花を生けることは、趣きを添えるとともに季節を表すこととなります。花入には、古銅・青磁・染付の他に、国内の窯で焼かれた陶器のものや竹筒をそのまま使ったものなどがあります。篠山城旧三の丸跡より出土した花入 (19 右写真) は、地元丹波の窯で焼かれたものです。三角花入と呼ばれるこの形は、古田織部が慶長6年 (1601) 頃に創作し、備前から信楽・伊賀 (三重県) そして丹波に伝えられたものといわれています。

篠山城は、慶長14年 (1609) に大坂城の抑えとして、徳川家康によって築城が命じられた天下普請の平山城です。代々城主には、徳川家譜代の大名が封ぜられ、姫路城とともに西国の重要な拠点とされていました。現在、二の丸跡には大書院が復元され、当時の姿を偲ぶことができます。



### 伊丹郷町 光明寺墓地跡出土の茶道具

平成4年度に発掘調査した有岡城跡・伊丹郷町の第114次調査において、元亀2年 (1571) 開基とされる光明寺の墓地跡で、50〜70歳の男性が埋葬された箱棺から故人が愛用したと思われる茶道具が発見されました。出土した茶道具は、棗・茶碗・茶巾筒 (右写真) です。

黒漆塗棗は、蓋の径は高さ1.6cm、口径5.2cm、総高5.2cmです。茶碗は、小振りで口径6.5cmで、当時流行していた楽家9代了入作を模した印が体部下に押されていました。楽茶碗とは楽家代々の当主が作ったものに限られ、この茶碗は楽茶碗うつしとして珍重されたのでしょうか。また、茶巾筒は陶器製で高さ5.2cm、口径2.6cm、を測り、体部には楼閣・樹・月・雁・舟の中国江南地方の風景が絵付けされています。茶せんや茶杓を入れたのぼてかご野点籠 (または箱) に収めてあったのでしょうか。

埋葬時期は、茶碗が了入を模したものであることから、江戸時代後期 (19世紀初頭) でしょう。時期の明らかな茶道具がセットでみつかることは全国的にも非常に珍しく、貴重な発見です。



黒漆塗棗



茶碗 (左) と茶巾筒 (右)

## 茶壺 (ちやつぼ)

日本では、茶壺はその名のとおり、<sup>はちや</sup>葉茶の容れ物ですが、中国では香料や薬剤の容器として利用されていたもののように。日本に輸入されたそれらの壺は、茶碗や茶入と同様に唐物と呼ばれ、銘が付けられ、珍重されました。

三田城跡（三田市）より出土した茶壺（20）は、ベトナム製と考えられるもので16世紀後半から17世紀にかけてのものです。この時期の三田周辺は、<sup>ぶんぐんしゅご</sup>分郡守護有馬氏から荒木村重・羽柴秀吉などつぎつぎに支配者が入れ替わり、江戸時代へと続いていきます。そして、各支配者の時期に三田城の改築が行われたことが発掘調査でわかっています。茶壺が使われていたのは、出土した他の遺物や遺構などから、16世紀後半の有馬氏の時代に限定されるようです。

## その他の茶道具

以上述べてきた以外にも、宮内堀脇遺跡では、炉や風炉に灰を<sup>ま</sup>蒔くための<sup>はいさじ</sup>灰匙（右写真）が、<sup>のむらこうきと</sup>野村構居（西脇市）からは、葉茶をひいて抹茶をつくるための<sup>ちやうす</sup>茶臼など県内では各種の茶道具が出土しています。

しかし、抹茶をすくう茶杓や湯や水を汲む柄杓などの竹製品、<sup>げふた</sup>牙蓋と呼ばれる茶入の蓋や、茶入を包みこむ裂（布）を縫い合わせた<sup>しふく</sup>仕覆と呼ばれる袋など有機質でできたものは、材質的に残りにくいため、全国でも出土例はありません。そのような中で茶せんや棗が出土していることは非常に珍しく、貴重な例です。



### 兵庫県下の主な茶道具の出土遺跡

a. 兵庫津遺跡	神戸市兵庫区	中国産天目茶碗（1） 美濃産天目茶碗（2）
b. 入佐川遺跡	出石郡出石町	美濃産天目茶碗（3）
c. 袴狭遺跡	出石郡出石町	茶せん（14）
d. 宮内堀脇遺跡	出石郡出石町	茶せん 灰匙
e. 洲本城武家屋敷跡	洲本市山手	茶の湯釜（9）
f. 明石城武家屋敷跡	明石市東中ノ町	風炉（10） 釜釣り手
g. 有岡城跡・伊丹郷町	伊丹市宮の前他	楽茶碗写し（7） 棗 茶巾筒（8） 水指（16） 建水（17・18）
h. 三田城跡	三田市天神	茶壺（20）
i. 篠山城旧三の丸跡	篠山市北新町	瀬戸肩衝茶入（11） 丹波花入（19）
j. 姫路城	姫路市本町	織部黒茶碗（4） 志野茶碗（5） 総織部平茶碗（6） 美濃芋子茶入（12・13） 唐津水指（15）



## 美術館所蔵の茶道具

茶の湯が盛んであった京都・大阪に隣接する阪神地域には、茶道具を所蔵している美術館がいくつかあります。そのうち、<sup>えがわびじやぶん</sup> 額川美術館所蔵の茶入（<sup>からものかたつきちやいれ</sup> 唐物肩衝茶入 銘「<sup>せいたかかたつき</sup> 勢高肩衝」）と香雪美術館所蔵の花入（<sup>かつらかごはないれ</sup> 桂籠花入）をここに紹介します。

銘「勢高肩衝」は、織田信長が所有していた時、天正10年（1582）本能寺の変の戦火をうけたといわれています。その後、<sup>つくる</sup>繕われて古田織部から徳川將軍家に伝来し、8代將軍吉宗のとき本多忠統が<sup>はいりよう</sup>拝領し、以後、藤田家・<sup>つばくらぐら</sup>額川家と所有者がかわり、現在に至っています。この茶入には、牙蓋・仕覆の他に、盆（唐物内朱縁 燕口 四方盆）が付属しています。

桂籠花入は、千利休が京都の桂川で漁夫から腰に提げていた魚籠を譲りうけ、掛花入にしたものといわれています。利休の<sup>わ</sup>侘びの精神をもっともよく今日に伝える代表的な道具といえます。利休の子・<sup>しょうあん</sup>少庵からその子<sup>そうたん</sup>宗旦、そして弟子の山田宗偏に伝わり、現在、香雪美術館に所蔵されています。



唐物肩衝茶入（重要美術品）



桂籠花入

額川美術館 西宮市上甲東園 1-10-40（阪急今津線甲東園駅下車、徒歩3分）  
香雪美術館 神戸市東灘区御影町郡家字石野285（阪急神戸線御影駅下車、徒歩10分）

## みんなで守る文化財



竹田城 草刈り風景

朝来郡和田山町にある国指定史跡「竹田城」は、別名虎臥城ともいい、標高353mの頂上に築かれた眺望の素晴らしい山城です。永享・嘉吉年間（1429～44）に山名宗全が築き、文禄～慶長（1592～1615）にかけて再整備されています。慶長5年（1600年）10月28日、城主赤松広秀が鳥取城攻めに際し鳥取の町を焼いた責任を負って自害したため、廃城となりました。

天守を中心とした構造や、石垣などが良好な姿で残っているため、昭和18年（1943）に国の史跡に指定され、往時の姿を偲ぶことができます。こうした史跡を後世に伝えていくためには、多くの人手や経費がかかり、地域の方々のご理解とご協力が欠かせません。夏草の生い茂る季節、地元のボランティアの方々に、当事務所の親睦会である埋文会有志も加わって、草刈り作業にいい汗を流す1日を過ごしました。



## ● 事務所展示室企画展 ● 「考古学からみた米の文化」 ～お米とくらし～

約2300年前に日本列島に伝わった稲作文化は、現在のわたしたちの生活に深く根ざしています。

最近では、縄文時代の遺跡から米が出土する例がふえてきていますが、水田で稲を栽培するという技術が普及したのは、弥生時代のことです。

水田に水をたたえるには水平であることが必要で、川から水を引き、高低差のある田んぼに水を分配するためには、高度な土木技術と組織的な労働力が必要です。稲作とともに、人々の社会や暮らしが変わっていくのは、こうした理由によるものです。

お米が主食となり、誰もが口にすることができるようになったのは、そんなに昔のことではありません。

実りの秋、先人の足跡をたどりながら、こどもたちと一緒に今の暮らしを考えて頂ければ……そんな展示を企画しました。ぜひ事務所にお気軽にお越しになって、ごらんください。

会期：平成13年10月15日(月)～平成14年4月19日(金) 開館日時：平日午前10時～午後4時



### 『ひょうごの遺跡』の発行と送付について

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所の情報誌『ひょうごの遺跡』は、不定期ですが年4回の発行をめざして編集しています。

「ひょうごの遺跡」は当事務所及び県立の博物館・図書館・フェニックスプラザ・県民会館などの施設や県民局で配布しています。また、閲覧用としては県立学校や県内の市・町立の博物館・資料館・図書館に配置しています。お近くの施設にお立ち寄りの際、ごらんください。

本誌の郵送をご希望の方は、お手数ですが、返信用封筒（大型の定型封筒：23.5×12cm）に90円切手を貼り、送付先を書いて、当事務所の整理普及班へお申し込みください。

『ひょうごの遺跡』についての、ご感想・ご要望などがございましたら、当事務所整理普及班までぜひお寄せください。



文化財愛護シンボルマーク

### 編集後記

今回は、茶の湯をテーマに、県内の教育委員会や美術館のご協力を頂き、出土した茶道具を特集しました。

茶の湯は奥深いものです。限られた紙面でその魅力が少しでもお伝えできたでしょうか。

美術館や、各地の茶室で催される茶会に足をお運び頂ければ、心がまったりとするひとときを味わって頂けると幸いです。（千と大と婆）